

奥の細道むすびの地「大垣」十六万市民投句

一般の部

令和三年四月度 入賞句一覧 投句数 五百五十一句



特選

名和 永山 選

手繰り寄す鶺鴒に山の闇絞る

大阪府門真市 川上 なみ子

「鶺鴒」は日本に古くから伝わる漁法である。現在では観光として楽しまれているが、小舟の穂先で焚かれるかがり火は、鮎を驚かせる役割を担っている。動きの活発になったあゆの鱗がかがり火に反射することによって、鶺鴒に捉えられる。掲句は、鶺鴒は手にある縄を見事に操るが、その鶺鴒は、闇を絞っている、ますます闇を深くすることに、鶺鴒の楽しさを見たのであろう。「鶺鴒に山の闇絞る」の措辞は、なかなか風情がある。

出窓開く頃合ひを見て囀りぬ

大垣市 福田 木綿子

この句の素晴らしさは、季語「囀」の本意をよく捉えているところにある。「囀」は、雄鳥の縄張りを守る鳴き声であり、また雄鳥への求愛の声である。掲句は、「頃合ひを見て」と、相手の様子をうかがい囀るといふのだから、何かを意識していることがわかる。「囀」を使つた多くの句は、鳥同士の鳴き声を交わすことを詠んでいるが、その鳴き声を「地鳴き」といって、「囀」とは区別したい。

隠れ里日がな雪解の谿の音

養老郡養老町 田中 紫香

隠れ里とういうのだから、山奥なのだろう。「日がな」は、一日中という意味。雪解け水が流れる谷間の音が、途切れることなく、と同時に、今も隠れ里に生きて住み続ける人々が想像できる。「隠れ里」「雪解」「谿の音」と、情景が鮮明に写されている句である。

秀逸

三・一一瓦礫ひとつが語りだし

大垣市 田口 貞善

雲間へと突き刺すごとく燕飛ぶ

大垣市 佐竹 余史美

店閉ざす格子窓にも春の塵

岐阜市 堀江 美州

白線流し美空へ流る卒業歌

大垣市 北島 暁子

菅公に継る親子や梅八分

大垣市 山田 賀子

ゆつくりと水車の軋む早春譜

不破郡垂井町 児玉 信子

辻々に芭蕉の句碑や花の河

愛知県名古屋市 宮井 寛

スカーフの先を操る春の風

大垣市 高木 歌佐

矛先を仮病でかわす四月馬鹿

神奈川県川崎市 佐藤 廣枝

席替えに祈りを込めてヒヤシンス

三重県四日市市 藤田 勝民

入選

一般の部

薄氷のやがて消えゆく昼の月

大垣市

立川 昌子

すれ違ふ娘こゑやはらかに春裕

大垣市

平野 きぬよ

震災を全て知ってるおぼろ月

大垣市

安田 むつこ

ふらここや抱きて幼の寝息聞く

大垣市

松岡 みつ

草潜にさへずりこぼし二羽三羽

大垣市

和田 勝子

首塚に彼岸桜の散る夕べ

不破郡垂井町

傍島 法苑

日の匂ひ羽根に宿して春の鴨

大垣市

高田 雅章

校庭の球児巻きこむ春埃

岐阜市

村瀬 充夫

葉桜が好きという人僕も好き

岐阜市

船渡 恵

手話の子が指で囁く花吹雪

大垣市

村田 通夫

花びらが染める足元けさの雨

大垣市

矢代 由美子

揚雲雀開店知らすアドバルン

大垣市

久保田 悟義

美濃桜流れて何処伊勢の国

大垣市

土屋 和馬

流転して形を変える花筏

兵庫県芦屋市

田原 トミエ

溪流に身を振らせて朧月

大分県宇佐市

安倍 凡覚

ポロネーズ鍵盤隅の春埃

岐阜市

桐山 なほ美

掠め飛ぶつばめを睨む仁王像

大阪府東大阪市

森 佳月

点滴のきらりと落ちて冴返る

大垣市

村瀬 佐智子

春塵や磨きし愛車直ぐ洗う

本巢市

土川 楽人

サイレンがぐさりみちのく震災忌

大阪府堺市

椋本 望生

選者吟

いくさなき地上に並ぶつくしんぼ

永山

